

ヨーゼフ・ロートのアメリカ像

—『ヨブ』を中心に—

三木 恒治

岡山理科大学理学部応用数学科

(2007年10月1日受付、2007年11月2日受理)

序

東方ユダヤ系のドイツ語作家ヨーゼフ・ロート(1894-1939)は、新聞社の特派員として旅行記やルポルタージュを発表する、いわゆる「ジャーナリズム文学」の草分け的存在である。同時に小説家としても独自の観点からさまざまな作品を著し、『ラデツキー行進曲』(1932)で一躍勇名をはせた。しかしその出自のゆえナチス政権下では葬り去られ、第二次大戦後もしばらくの間は取り沙汰されることはほとんどなかった。彼の再評価は、1956年彼の選集を出版した友人ヘルマン・ケステンの功績に負うところが大きい。70年代にはブロンセンによる伝記やケステン自身の選集の充実などによって、ジャーナリストとしての活動が評価されただけでなく、ドイツ語圏での代表的作家として取り扱われることとなる。ロート研究もこの時期盛んとなるが、アメリカとロートとの関連を論じたものはさほど多くない。著名なものではボードー・ロルカの「ヨーゼフ・ロートのアメリカ像」(1972)があるが、ロート研究のテーマとして「アメリカ」は主流とはなっていない。部分的にロートのアメリカの技術文明批判や、ユダヤの父権の弱体化をアメリカとの因果関係で論じたものはあるが、いずれも包括的なものではない。1) たしかにロート自身はアメリカの土を一度も踏んでおらず、行動範囲は終生ヨーロッパにとどまった。しかしながら没落しつつあるヨーロッパと対照的に、ロートの存命中に日々その存在感を強めていた海の彼方の「文明国アメリカ」の功罪についての彼の言及には注目すべきものが多く、危機の時代を先取りした警告となっていることは疑うべくもない。

19世紀中葉、産業革命の波が遅れ馳せながら東欧にも押し寄せ、シュテトルに暮らす東方ユダヤ人の生活形態を一変させることとなる。手工業、小売商を中心に、東西ヨーロッパの仲介者として活動してきた彼らの役割は、新たな流通体系のもとで変革を迫られ、あまつさえユダヤ人に理解を示したオーストリア・ハンガリー帝国の開明的な君主フランツ・ヨーゼフ2世の死とそれともなうハプスブルク体制の弱体化、1881年の歴史的ボグロムといった政治社会情勢が、シュテトルの存続を脅かし、秩序の崩壊に追い討ちをかけることとなる。時代の激動の荒波の最前線に立たされた彼らの多くは、窮状を打開するため西欧への同化、シオニズム運動、社会主義への道をたどったが、アメリカ移住もサバイバルのための大きな選択肢の一つだった。

ロートの作品では、こうした不安定な状況で「掟と慣習」の外に生きることを余儀なくされた東方ユダヤ人が、伝統からの乖離、アイデンティティー喪失の危機といかに向き合ったかが主要なテーマとなっているものが多い。そうした彼らの存在にかかわる根本的な問題を、ここではヨーロッパの対極を構成し、文明のディレンマを多層的なかたちで抱えこんだ「新世界アメリカ」の視点から扱ってみたい。そこには数奇に満ちたロートの生涯や、作品の全体像を解明する重要な手がかりが潜んでいるように思われる。主たる作品、エッセイとしては、『ヨブ』(1930)、『放浪のユダヤ人』(1927)、『アンチクリスト』(1934)を取り上げることとする。

1. ロートの作品で描かれたアメリカ像

ロートの初期の代表作『サヴォイ・ホテル』(1924)では、第一次世界大戦の東部戦線の帰還兵でロシアとヨーロッパの境界にあるサヴォイ・ホテルに逗留することになった主人公ガブリエル・ダーンの視点から、旅芸人や夢破れた踊り子、くじ売りなどここに滞在しているさまざまな人々の悲喜こもごもの人間模

様が一人称の形式で語られている。物語のハイライトは、この辺境の町2)の出身でユダヤ系アメリカ人の大富豪ヘンリー・ブルームフィールドの里帰りの場面である。彼の帰郷の目的はビジネスではなく、亡父の墓参のための一時的なものであるが、そのうわさは「悪徳、貧困、疫病の蔓延する街」3)の人々に希望の光をもたらす。そして伝統にとらわれないこの自由人の到来によってホテルは夜会、ダンスの毎日となり、活況を呈することとなる。束の間のことではあったが、ブルームフィールドはすべての要求を聞き届けてくれる救世主に思われるのである。彼の人物像に体现されているアメリカは、夢を実現し幸福を約束してくれる新天地として想定されている。ホテルを住处としている革命家ツヴォニル・バンシンにとっても、アメリカは単純で力強い信仰をおくことができる理想郷となっている。しかしブルームフィールドも彼らの期待に応えることはできず、やがて生じた群集の暴動のさなかホテルは炎上し、最後にガブリエル・ダーンは虚しさに包まれて町を去ってゆく。物語は帰還兵たちと一緒に乗った列車の中で彼がつぶやく「アメリカ」4)という言葉で締めくくられているが、それは主人公のあてどない彷徨の道標のような印象を与えている。また『ツイパーとその父』(1928)では、怪我によってベルリンの劇場を去ることになった主人公の恋人エルニナが、ハリウッドで活躍する後日談が語られている。アメリカではあらゆることが可能であり、彼女の美しさは「アメリカでなければ考えられない」5)のものであり、その気品も「アメリカで勝利を手にした人間にしか見られない優雅さ」6)と讃えられている。両者に見られるアメリカは、ユダヤ人のみならず行き場を失ったヨーロッパの人々にとって成功を約束してくれるユートピアの地であり、ナショナリズムと古い偏見のなかで没落してゆくヨーロッパの彼岸で生まれた新たな啓蒙的価値観である「自由」と「富」の象徴となっている。

第一次大戦後アメリカの価値観、影響力は急激に高まってくる。チャールズ・ドーズの導入したドーズプランは通貨安定をもたらし、戦後ドイツの経済的混乱を收拾することとなった。また自動車王フォードの理念は、高い生産性と賃金、労働の人道性を実現するものとして脚光を浴びる。7) チャールストンやジャズなど、アメリカの新しい娯楽文化もヨーロッパを席卷していた。豊富な資源、整備された流通体系とも相俟って、近代技術文明の先進国アメリカは、戦争で疲弊したヨーロッパの対極にある光明の地として存在感を強めてきたのであった。しかしあまりに急速な産業の進歩、消費のスタンダード化は人間疎外、個性の喪失、モラルの低下をもたらし、新たな精神的荒廃を招来する火種となったことも確かである。

ロートの後期の作品では、そうしたアメリカの影の部分がクローズアップされてくる。『レヴィアータン』(1939)では律儀で正直者で、腕も商品の質もしっかりした珊瑚商人の主人公ニッセン・ピチエーニクが、アメリカの人工のセルロイド製の珊瑚の魔力に引き込まれ破滅してゆく。彼は珊瑚に心底から愛情を注ぎ、加工の段階ですら生き物として扱う。そうした彼の自然体としての姿は、「海藻や海神を想起させる赤銅色の山羊髭」8)にもよく表されている。そうした素朴な彼を邪道へと誘うのは、ハンガリー出身のイエネー・ラカトスという男だが、彼はロシア語、ドイツ語などヨーロッパの諸言語を流暢に話し、「滑らかな、青黒い頭髪にボマードを塗り、ピカピカのカラーをつけ、ネクタイをしめ金のステッキを持ち歩く」9)という派手な装いはピチエーニクと好対照をなしている。彼はニューヨークの商会で人造珊瑚を取り扱い、それをハンガリーやロシアの農村で売りさばっている。人造珊瑚は本物に比べ値が抑えられ、見た目には遜色がないのである。ピチエーニクは彼の巧みな誘惑に乗せられ、本物に偽物を混ぜて儲けを上げようとする。しかし折悪しくその頃村ではジフテリアが蔓延し、彼の珊瑚が不幸と病気の元凶との噂が広がる。客足は激減し、厳冬のなかで妻も亡くなり、彼は自暴自棄となり零落する。一方ラカトスは、ピチエーニクの馴染みの客たちを横取りして繁栄を極めて行く。蓄音機で騒々しい音楽を流し、セルロイドの珊瑚を平然と客に売りつけるラカトスは、自然や倫理を軽視して暴利を追求する大量生産時代の新たなタイプの商人である。その巧みな戦略に籠絡され、偽物と知りながら彼を容易に受け入れ、長年つきあいのあるピチエーニクを見捨ててしまう客たちの姿は、アメリカの消費文化の底の浅さを風刺したものとみられる。そして主人公が再起に一縷の望みを抱いてアメリカ大陸を目指す途中遭難死するという結末は、理想郷のアンチテーゼとしてのアメリカを示唆しており象徴的である。他にも『偽りの分銅』(1937)ではアメリカ郵船の悪名高いロシア人代理業者が、ロシア軍の脱走兵たちを駆り集め、カナダや南米へ送り出している。また『タラバス』(1934)では故郷ウクライナでテロ事件に関わり親に勘当された主人公が「好奇心とはるか彼方の国の風評に惹かれて」10) アメリカへ渡るが、新たな人生に乗り出したはずが石とコンクリートの大都会に囲まれてホームシックに襲われ、環境に馴染む努力を怠り自堕落になってしまう。

以上概観したように、自由や富と表裏一体となった非合法的な胡散臭さ、自然から人間を引き離すいかが

わしさ、利潤追求に邁進する薄っぺらな効率主義というアメリカの負のイメージは1930年代以降の作品、著述において顕著となってくる。この時期を境としたロートのアメリカ像の変化は、どこに起因するのだろうか。この問題を、まずその転換期の代表作『ヨブ』において考察してみよう。

2. 『ヨブ』におけるアメリカの社会的背景

ロートの作家活動のほぼ中間期に当たる1930年に出版された『ヨブ』は、アメリカが主要舞台として設定されているロート唯一の作品といえるだろう。まず物語のあらすじを概観しておく。主人公メンデル・ジンガーは東欧の小さな町（物語では「クルチェスク」という名）の正統派ユダヤの教師である。彼は、「敬虔で、神を畏れる、普通の、ごくありきたりのユダヤ人」11)である。その職はユダヤのヒエラルキーでは下位に置かれ12)、「聖書の知識を子供たちに伝授する」13)というものであった。いわば知識の切り売りを生業としていたわけで、「熱意をもって教えていたが、目立った成果は上らない」14)という仕事ぶりである。彼の容貌も「黒く大きな目と、青白い顔を覆い隠す髭、頭には黒い絹の畝折り生地帽子、身を包む黒いカフタン」15)というありふれたユダヤ人のものだ。副題の「ある平凡な男の物語」は、こうした彼の地味なプロフィールから来ている。彼の住むシュテトルは貧困と打ち続くコサックの襲撃の脅威に悩まされ16)、その荒廃した状況は「打ち捨てられた難破船」17)のように放置されている荷馬車が良く物語っている。「貧しいものは無力であり、己の運命に甘んじなければならない」18)とするメンデルの保守的な性格と対照的に、妻デボラは「人は自分自身を助けるようにつとめなければならない。そうすれば神は彼を助け給うであろう」19)と考える開明派で、伝統や慣習に執着しない。息子たちが兵役につき家を離れることで夫婦の相反的な性格は表面化し、さらに不具の末子メヌキムの誕生は相互の不和に追い討ちをかけ、家族の崩壊が始まる。やがて一家は深刻さを増すシュテトルと家族の窮状を打開するべく、ロシアの兵役を忌避してアメリカへ逃れサムと名を改めて保険代理業をはじめた次男シェマルヤーの誘いでニューヨークへ渡る。しかし本当の悲劇はここから始まる。兵役を免れたはずのシェマルヤーはアメリカで戦争に志願して戦場で落命、そのショックでデボラは突然死、娘ミルヤムは発狂、と畳み掛けるように不幸が一家にふりかかる。まさに旧約聖書の「ヨブ記」さながらの地獄絵が展開されるのである。ナショナリズムの意識の欠如したユダヤ人にとって、家族は国家や社会と同次元の意味を持ち、肉親の情を超えた形而上的な刻印を帯びている。「存続に不可欠のアイテム」20)とも言うべきその家族を失ってメンデルは生ける屍となり、東方ユダヤ人の同朋であるレコード店主スコブプロネクのもとに身を寄せる。そして時が止まったメンデルを捨て置いて、無常にも昼夜の別なく日々が過ぎてゆく。「アメリカはわしらを殺してしまった。アメリカは人の命を奪う祖国だ。わしらの故郷で昼間だったものが、ここでは闇夜だ。故郷で生だったものが、ここでは死だ。……」21)という孤独のなかでのメンデルの苦痛の呻きにも似た独白は、この作品のアンチ・ユートピアとしてのアメリカ像を集約している。

物語の時代設定は19世紀末から20世紀初頭にかけてであるが、この時期のアメリカの社会背景について少し触れておこう。1890年には「フロンティア消滅宣言」が出され、アメリカのパイオニア時代は終焉を告げる。それまで西部へと向かっていった人や物の流れも、ニューヨークやシカゴなど北部、東部へと集中し始める。19世紀前半、ドイツ系を中心としたユダヤ人のアメリカ移住がはじまるが、1880年代にはロシア、東方ユダヤ人が増加してくる。第一次大戦前にはヨーロッパ各地での民族主義の高揚ということも手伝い、開戦時までに東方ユダヤ人の三分之一がボグロムや兵役を逃れるため、家財を売り払って渡航費を捻出しアメリカに渡ってきたのである。22)ジンガー一家もブレーメンからニューヨークへ出航する「ネプチューン号」の三等船室に押し込まれ、15日間の船旅の末アメリカに足を踏み入れ、検疫のためエリス島の収容所で4日間過ごし、やっとニューヨークにたどり着いたのである。もちろんアメリカでの自由と豊かな生活が彼らの間で喧伝されていたことはいまでもない。人種の坩堝であるアメリカは、ユダヤ人を拒むこともなかった。というよりも東方ユダヤ人を大量に受け入れてくれる唯一の国家であった。シュテトルの隣人たちとの別れの場面で、誰もが口を揃えてメンデルに「アメリカはすばらしい国で、ユダヤ人が望みうる最高の願いはアメリカにたどりつくこと以外にはない」23)と言い聞かせる。妻のデボラも「アメリカはコサックのいない自由で喜びのある国」24)と期待に胸を膨らませ、両替の算段まで始めている。

しかし到着後、シェマルヤーの友人マックに勧められて街の散策に出たメンデルを待ち受けていたアメリカのイメージは、「煤と塵と炎熱の厚織りのヴェール」25)であり、疾走する車や鉄道のかもし出す騒音と叫喚であり、「溶けたアスファルトの突き刺さるようなタールの臭い」26)をはじめとするさまざまな腐臭

である。彼はそれまでの故郷の牧歌的な世界から混沌の渦巻く都会に連れ出され、圧倒的なメカニズムの横溢に五感を覆いつくされるのである。「アメリカが彼に襲いかかり、アメリカが彼をずたずたに叩きのめし、アメリカが彼を粉々に打ち砕いた」(27)のであった。またこの国は万事がスピードに支配され、早朝の雪すら新聞配達少年たちの走り回る足によって瞬時に溶けてしまうほどなのである。

大都市は異質な文化、生活習慣を身につけた移民を大衆、労働者、消費文化の担い手に変身させ、伝統的な人間関係を解体する。こうした大衆社会で最も需要が高かったのが単純作業であり、移民の多くは人間を搾取する都市の機械的リズムに組み込まれてゆく。ただユダヤ人の場合はその民族的性格から商業、流通分野に携わるケースが目立ったが、新しいライフスタイルは家族中心のユダヤの伝統を容赦なく切り崩し、大衆文化、メディアが彼らを支配することになる。資本、労働力、情報が集結する大都市ではすべてが表層を漂い、主体の内実は空虚なものとなってゆく。新しい浅薄な社会的価値体系の中で、彼らは苦闘を余儀なくされる。

ニューヨークに着いたユダヤ人の四分の三は、ローアーイーストサイド地区に移住し、その数は200万を数えた。ここは世紀転換期最も人口が密集した地域で、新しいユダヤ人コミュニティも形成され、被服産業や小売店が営まれていた。この界限にはレンガ造りの牢獄のような建物が林立していたが、衛生環境は悪く、家の中は薄暗く悪臭が漂っていた。メンデル一家の入った住居も「階段は傾いて汚れ、いつも真っ暗で、生暖かくじとじと湿っていて、おまけに猫のにおいがする」(28)というひどい環境だった。そのうえ、「メンデルは台所で寝て、妻と娘はたった一つしかない居間で一緒に寝る」(29)という手狭さだった。イタリア移民地区とも隣り合っており、他にもアイルランドやポーランド移民なども含めて、エスニックコミュニティの縄張り争いが暴動に発展することもまれではなかった。(30)さらにユダヤ人同士、たとえばドイツ系と東方系の間ですら既得権益をめぐる争いが多発した。とはいえ勤勉で上昇志向の強い彼らのなかには、短期間で経済的成功を収めた者も少なくない。貧しい行商人から世代を経ずして百貨店の創業者に上りつめる者や投機で大富豪にのし上がる者など、1890年代には未曾有の好況の波に乗って、そうしたにわか成金が続出した。そこまでは行かなくても、中産階級への梯子をよじ登った者は超過密のこの地区を離れ、郊外の住宅地へと移っていった。シェマルヤーもそうしたサクセスストーリーを現実のものとしてつあった。ジンガー一家がアメリカ到着後腰を落着けた20世紀初頭のニューヨークは、概略するとそうした状況であった。しかし息子の成功は結果的には家族の解体を加速させ、それを契機に物語は悲劇へと突き進んでゆくことになる。メンデルを実存の根底から苦境へ追い込んでゆくのは、メカニズムが引き起こす都市の喧騒や不協和音よりも、むしろ家族の中での孤立とそれともなう父親としての威厳の喪失であった。

3. 父権の否定

正統ユダヤ教を信奉し、厳格な秩序を旨とするメンデルにとって、アメリカは自己実現の場とは程遠く、「父」の権威が否定される場であった。海からやってきたヨーロッパ人によって発見されたことを訴えるかのように、海路ニューヨークに到着した移民をまず迎えてくれるのは自由の女神像である。高々と聳えるその威容は、新世界の象徴であり、父権の否定を暗示するものであった。「アメリカはかつてのパレスチナ同様神自身の国であり、ニューヨークはエルサレムのような奇蹟の都市である」(31)とメンデルの周辺ではささやかれていた。自由の女神の持つ松明はユダヤ人たちをエジプトの奴隷状態から解放した火事を連想させるし、彼らの行く手を照らし出す導きの光のようにも思われる。しかし自由の女神像は実のところ中身が空洞で、夜間は電気のイルミネーションによって照らし出され、こげおどし的なものものしさは共同体、中心が欠如しているアメリカ社会の鏡像であるかのようにメンデルの目には映ったことであろう。(32)アメリカの歴史は、ヨーロッパという専制的な「父」からの離脱に端を発し(33)、第一次大戦後の列強の帝国解体という「父」の権威の失墜を機に勢力を拡張することになる。つまりアメリカ社会の本質ともいえる「自由」「幸福」「富」という人間の新しい理想像は、「父」の没落と「母」の復権を背景としているのである。(34)「放浪のユダヤ人」では、検疫所での格子を通して自由の女神像を目にした時の「どちらが閉じ込められているのだろうか」(35)というアメリカ移民の感慨が綴られているが、それはメンデルの思いとも相通じ、アメリカでの一家の行く末とメンデルの立場を暗示するものであった。メンデルはそれまでの拠り所であったユダヤ人学校、シナゴグ、そして家長として存在感を顕示していた家族を失ってしまう。

アメリカ出発前に既に家族崩壊の兆しは見えしており、メンデルの家庭内での求心力は弱まっているが、アメリカでは家族の解体にさらに拍車がかかる。アメリカでの成功を目指しているシェマルヤーは「サム」と

いう英語名に改名するが、これは父親から受け継ぐべきものを拒否し、古い社会からの解放を願っていることを意味している。36) 下船したメンデルの目には三人を迎えに来たこの次男が、黒い服を着たシェマルヤーと明るい上着と緑のつやのあるシャツを着たアメリカ人サムとの二重写しに見える。髭をさっぱりと落とし、改名で過去との絆を断ち、金儲けに余念のない息子にとって、ユダヤの信仰や父親の権威はもはや模範足り得ない。旧社会の価値観の喪失はこの親子のライフスタイルの相違を通して明らかとなつてゆくのだが、父親の権威の構造を破壊するのは世代間の確執というよりもアメリカの技術万能社会である。英語はアメリカでの成功の前提であり、移民から真のアメリカ人になるためにはそれなりの適応能力が要求される。そのために移民たちは伝統、文化といった特殊性を捨てなければならない。特殊性が際立っているユダヤ人の場合はなおさらのことである。37) シェマルヤーは自分の息子にもマックリンカンという英語名をつけ、懸命にアメリカ人になりきろうと努める。言葉や生活習慣だけではなく、産業化、合理化においても子供たちは適応が早い。38) 一方メンデルは新たに始める仕事もなく、海を見ても故郷の茫漠とした大地を思い出すなど、望郷の念が肥大するばかりである。アメリカでは子供たちが家庭の主役となり、親を養うことになる。メンデルを朝食に誘うサムは、食事を家で取るという故郷の風俗習慣がアメリカでは無効であることをメンデルに知らしめることによって、自身のイニシアティブを強調しているのである。家庭での居場所を失ったメンデルは、いつしか「部屋の外に背を向けて窓辺に立つ」39) のが習慣になってしまう。これは「父」という家庭での絶対的権威を放棄したものの、アメリカの社会にも溶けこむことのできない、メンデルの宙吊りの状況を示している。40)

保険代理業で成功したシェマルヤーは活動半径を広げ、建設用地の投機や百貨店経営で財を成し、ローアーイーストサイドのエセックス街から富裕層の住む待望の河岸通り(アム・リヴァー)へと引っ越す。娘のミルヤムは「帽子と絹のストッキングで身繕いをし、気品ある令嬢を気取って」41) アメリカ人マックと付き合い、シェマルヤーの店の売り子となり家を出る。二人ともすっかりアメリカに取り込まれてしまったのである。メンデルとデボラは相変わらず路地のアパートにとどまり、「青く燃えるランプのもと、貧しい人たちと隣り合わせ」42) に暮らしていた。ただ家でしか食事をせず(しかもアメリカの時間帯とは異なり、故郷にいた時と同じように午後の3時と夜の10時というふうに決めている)、外出を嫌うメンデルに対し、デボラは息子の嫁と一緒に映画を見に行ったり地下鉄に乗ったりと、ユダヤの伝統に反発するような「活動性」が以前にもまして前面に出てくる。その結果「アメリカ」に背を向けたメンデルだけが家族の中で取り残され、いつのまにか無為徒食の存在と化してゆくのである。しかし家庭内での疎外感に包まれながらも、メンデルは数ヵ月後には何もかもがせかせかと先を急ぐニューヨークにおいて、アメリカ消費社会の目まぐるしいペースに巻き込まれることなく、ゆっくり歩むことを学ぶことになる。

そうしたさなか、アメリカは中立を守るであろうという大方の予想を裏切り、第一次大戦に参戦する。そしてまもなく、兵役に志願したシェマルヤーのヨーロッパ戦線での戦死の報がもたらされる。ロシアとは異なり、アメリカはシェマルヤーにとって祖国そのものになっていたのである。参謀付きのため身に危険が及ぶことはあるまいと考えるデボラは、戦争の英雄ともなればユダヤ人にも名実ともに市民権が与えられることも手伝って、息子の出征を案じるメンデルを嗜めるが、その彼女が息子の戦死に衝撃を受け、卒中であっけなく亡くなる。皮肉なことにシェマルヤーはアメリカに同化しすぎたため「祖国」に殉じることとなったのである。デボラの死とミルヤムの発狂も、シェマルヤーの運命の延長線上の同化ユダヤ人の悲劇である。家族を失ったメンデルはさらなる孤独へと追い詰められるが、彼の社会的非生産性と同化への懐疑がアメリカの外に彼を置き、同化したがゆえに運命に巻き込まれた家族とは対照的に、失意のうちにも生き延びることを可能にするのである。43) 弱者たちを選び好みして破滅させようとする無慈悲な神を呪いながらも、伝統的な生活慣習を固守したメンデルには、ヨブの結末さながら最後には神の救いの手が差し伸べられる。病身を理由に故郷に置き去りにしてきた末息子のメヌヒム44) が病を克服して音楽家として成功し、公演のためやってきたニューヨークで親子は思いがけない再会を果たすのである。皮肉にも親子再会と物語の好転の契機となったのは、アメリカ文明の申し子である蓄音機から流れてきた音楽であった。アメリカの最先端の医療技術をもってしても治癒が難しいとされたメヌヒムの病気が、ヨーロッパでしかも家族の関知しないところで回復を遂げていたのである。メヌヒムの音楽家としての成功がもたらすハッピーエンドはあまりにも安直な締めくくりという指摘もあるが45)、アメリカに置き去りにされたメンデルがヨーロッパからやってきたメヌヒムによって光明を与えられ破局が逆転するという作品構造には、「父親不在の社会アメリカ」に対するロートの痛烈な批判を見て取ることができよう。メヌヒムの音楽、つまり芸術の観点からの救済と

いう結末も、裏を返せば政治的社会的解決の拒絶であり、アメリカに対する作者の絶望感をいっそう際立たせるものとなっている。

4. ロートのアメリカ観の変遷

既に見てきたように、1920年代のロートの作品においてアメリカは理想の地として描かれているが、30年代になるとこのイメージは修正される。アメリカの合理主義は人間を未熟な状態から救い出してくれ、アメリカはユダヤ人にとって流浪に終止符が打たれる地のはずであった。しかし『ヨブ』で提示されているのは、果たしてユダヤ人の家族がアメリカで生き延びる可能性があるのかという問題である。ここではアメリカ社会全体の構造にも批判が向けられている。ロートのアメリカ離れがいつどのようなかたちで増幅していったのか確言はできないが、パリに移住した1925年頃が大きな転機だったとの見方が有力である。46)ただ1920年代のロートの著述では、露骨なアメリカ批判はまだ見られない。ロートのアメリカに対する嫌悪感が最も尖鋭な形で打ち出されたのは、1934年の『アンチクリスト』である。この章では、そうしたロートのアメリカ観の変遷の背景にあるものを探ってみよう。

この転換期の前後に生じた最も重要な歴史的な出来事は、ワイマール共和国におけるナチスの台頭である。ファシズムは、ユダヤ人にとっては人間性、民族のアイデンティティを破壊するものに他ならなかった。技術、産業が人間を支配するアメリカがロートのなかでナチスと二重写しになったことは、『アンチクリスト』で繰り返し語られている。この書は「何年も前から私たちの中に住みつき、私たちが見抜けないよう変装して、悪意の翼を私たちの頭上に広げる反キリスト者」(47)という冒頭の下りから一貫してナチスの政権掌握に対する警告となっており、アメリカ批判はその関連で展開されている。この時期ロートは、パリにあってドイツを追われた亡命作家たちの出版の支援活動に奔走していた。ユダヤ人を中心に知識人たちの間ではナチスの危険性は現実味を帯びたものであったが、30年代前半の時点ではまだまだ一般の市民には実感として迫ってくるものではなかった。むしろ彼らはその大言壮語に浮かされ、溜飲を下げていたというのが実態であろう。「われわれが現実だと思込んでいるものは幻想に過ぎず、われわれが認識と呼ぶものはすべて偽りである」(48)という著者の指摘は、ナチスの正体を見抜けない市民の盲目ぶりに向けられたものである。彼は『アンチクリスト』の直前には、『ヨーロッパは第三帝国抜きでしか存続しえない』というエッセイを著しており、ナチスドイツの出現に危機感を募らせて警鐘を鳴らし続けていた。

ロートがここでとりわけ意を注いで批判したのは、ナチスの残忍で暴虐な本質そのものよりも、それを巧みに偽装して人心を捉え、真相を明かすことなく大衆を意のままに操る巧妙な手口である。「牢獄の屋根にヒューマンイズムの旗を掲げ、ある民族に祝福と安らぎを与えると約束する一方、その民族を没落へと追い込む準備をしている」(49)という叙述は、ナチスの欺瞞を暴いたものとなっている。ロートはこのエッセイ全般にわたって、舌鋒鋭く、皮肉を込めた比喻を織り交ぜながら、仮面の下に隠された獣性とそれがもたらす災厄に注意を喚起するよう促しているのであるが、ナチスと並んでその引き合いに出されているのがアメリカであるところが注目に値する。両者は「アンチクリスト(反キリスト者)」という言葉で括られているが、どちらも黙示録的な危険な力の権化であり、世界征服をもくろむ悪の象徴となっている。アメリカ映画産業の活動は、人間を形骸化するという点においてファシズムと同一視される。「鉤十字」と「ハリウッド」はともに反キリストのシンボルであり(50)、人間、自然を搾取するメディア、資本主義がその後ろ盾となっている。そしていずれも悪企みを隠蔽するシステムを確立している点でも相通している。また家父長の権威を失墜させるアメリカの「婦人解放」にもロートは「欺瞞の構図」を見て取り、否定的であった。(51)それは彼にとっては偽りの解放であり、社会へ進出すれば女性の美德は損なわれるのであり、いわゆる「キャリアウーマン」は彼の作品では描かれていない。

1927年に執筆された『放浪のユダヤ人』は、東方から西欧、さらにアメリカへと移動してゆくユダヤ人のさまざまな思いが綴られている。なかでも《ユダヤ人がアメリカへ行く》の章は、『ヨブ』におけるメンデル一家のアメリカ移住の場面の注釈のようなエッセイとなっており、作品解釈のうえでも相互補完的な役割を果たしている。ここではロシアやオーストリアの兵役逃れでアメリカに渡る苦勞、大洋に対するユダヤ人独特の恐怖感、入国時のやっかいな手続きなどが語られてはいるものの、「アメリカは自由を意味し、常に親戚のものが住んでいる」(52)という言葉には自由と夢の新天地に寄せる東方ユダヤ人の期待感が垣間見え、ヨーロッパの偏狭な民族主義を脱却したアメリカのリベラルでポジティブな側面が称揚されている。『ヨブ』で求められているような社会に適応するための英語力も特別必要とされていない。ニューヨークのユダ

ヤ人はイディッシュ語で十分コミュニケーションがとれるのである。エッセイの最後では検疫所での隔離状態にあっても、いつしか自分が富豪になる姿を想像しているというユダヤ人のささやかな希望が語られている。全体的にここではアメリカに対する楽天的な観方が支配しているのである。こうした明るい気分はアメリカという地域性を超越して、「黄金の20年代」の繁栄を謳歌していた時代の思潮が作り出していたものかもしれない。

ところが1934年の『アンチクリスト』では基調は一変し、ナチズムと並行する形でアメリカ批判が展開されている。特にその矛先となったのが、「現代人のハーデス（冥界）」53)と形容されたハリウッドの映画産業であった。ロートの映画に関する論評は、他にも1924年の『アメリカ化された映画』がある。ここではエルンスト・ルビッチュの映画評が中心となっているが、「観客を圧倒する音楽や絵画的装飾、場面のめまぐるしい転回が「アメリカが突然の破局のように現れる色彩と音響のシャワー」54)と表現されている。この段階では批判というよりも、サイレンとからトーキーへ移行する過渡期のアメリカ映画の迫力溢れるスペクタクルに対する驚嘆の印象のほうが強い。ここでは、ユダヤの慣習に高い関心を示して積極的に映画化しようとするアメリカの映画監督を称えてすらいる。しかし十年後の『アンチクリスト』では、商業路線に乗ったハリウッド映画を明確に弾劾している。スクリーンの上で繰り返される動きや言葉、歌は純粹で誠実なものではなく、その影がリアルに映れば映るほど、本物の生きた人間は影のように化してしまう。映画では現実がイメージに置き換えられ、一片のシークエンスと化している。蜃気楼のように実在のないものに生命力を与え、死を弄び人間の内実を空洞化する、イメージの氾濫、利根的、機械的な映画のシステムに、ロートはファシズムの全体主義に通じるいかにわしさを見て取っている。ここでハリウッドは、「人々を己の国の影の分身に作り変えてしまう黄泉の国」55)、「Hollywood」(神聖な森)ならぬ「Hölle-Wut」(地獄の猛り狂い)と繰り返し揶揄されている。

また冒険者たちが一攫千金を夢見た地下資源(石油や金鉱など)も資本主義の構造のなかで整理され、その過程で彼らの夢は奪われていった。こうした底辺の人々の夢をかなえるアメリカンドリームこそが、それまでアメリカという多民族国家を活性化してきた源泉であった。しかし建国当初の原始的段階からアメリカは一気に近代国家へと駆け上がり、技術文明の発展を短期間で早急に推し進めすぎた。そのために、ヨーロッパが長い年月の間じっくりと培ってきた人文主義、人間の内面を豊かに形成してゆくという視点やプロセスが根本的に欠落していた。そして当然の帰結として、人間の価値や憧憬を破壊し続けるテクノクラシー、合理主義の支配する国となったのである。『ヨブ』でも、主人公メンデルは一人さびしく窓辺に立ち、「赤色光線の反射」や「規則正しく点滅するサーチライトの銀色の影」といった人工的な夜の光景を目の当たりにして、故郷の夜空の星のきらめきと万物をやさしく包み込む森の静寂を懐かしく思い起こしている。貧困は罪悪で富が美徳であるこの新世界では、人間が自然との調和から引き離され、功利主義のもと人間疎外が蔓延している。しかも万能のはずの技術文明が万能足りえず、デボラの死やミルヤムの発狂、メンデルの絶望感を救うすべを知らない。

アメリカもナチズム同様、ロートの目には野蛮性を残して急成長した神を恐れぬ国家に映った。そこでは人間が己の分を超え同じ人間に恐怖と不安を与え、人間を実体のない影にしてしまう冷血で無機質なシステムが構築された。アメリカとナチスドイツはともに、彼にとって人類を不幸のどん底に突き落とす黙示録的な強国となったわけである。56) こうした背景が、ロートのアメリカ観のネガティブな反転の要因であると考えられる。後年のロートのカトリック、神聖ローマ帝国への傾倒は、ドイツ、プロテスタント、アメリカという新興勢力、産業文明に対決するための、古き良き時代の神話的象徴の構図として理解できるだろう。57)

結語

『ヨブ』の最後は、主人公のメンデル・ジンガーがアメリカで公演を終えたメヌヒムとともにヨーロッパへ帰り、彼のもとで老後を全うするであろうという展望で締めくくられている。つまりアメリカはメンデルにとって流浪に終止符を打つ永遠の地とはなりえなかったのである。この物語は、アメリカという近代的社会のなかでユダヤ人の家族が生き延びる可能性があるのかという問いかけであり、同時にそれに対する強烈な否定となっている。ここでは救済の絶望感が、アンチ・ユートピアとしてのアメリカ批判というかたちで吐露されている。

東欧のシュテトルの外に生きることを余儀なくされ、かつ新天地にも馴染むことのできなかつたメンデル

のたどった軌跡は、異邦人としてヨーロッパを転々とさまようロート自身のものである。しかしそれは物語の一主人公メンデル・ジンガーやロート個人を超越して、東方ユダヤ人全体の運命を予言したものともなっている。彼らは旧態然としたシュテットの共同体と新世界の技術文明のメカニズムのはざまにあってアイデンティティー喪失の危機にさらされ、やがてナチズムの猛威の前に破局への道を歩んでゆくことになる。魂の故郷であるオーストリアも1938年ナチスドイツに併合され、その翌年ロートは失意のうちに世を去る。

ロートのアメリカ像は、時代の実相や自身を取り巻く状況の悪化、晩年の世界観の暗転をそのまま映し出しており、「存在の不安」と「出口なしの世界」という彼の究極のテーマを浮き彫りにしている。それはあたかもアメリカというフィルターを通して自らの運命を見据えているかのごとき終末論的様相を呈している。ただ『ヨブ』という題名に、運命の神に翻弄されながらも、人間愛に満ちた救世主と恩寵の到来を待ち望むロートの切実な願いを見て取ることはできないであろうか。

《TEXT》

Joseph Roth, Werke2 Das journalistische Werk 1924 – 1928, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Klaus Westermann, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1990 (以下 JRW 2 と略記)

Joseph Roth, Werke3 Das journalistische Werk 1929 – 1939, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Klaus Westermann, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1991 (以下 JRW 3 と略記)

Joseph Roth, Werke4 Romane und Erzählungen 1930 – 1936, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Fritz Hackert, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1990 (以下 JRW 4 と略記)

Joseph Roth, Werke5 Romane und Erzählungen 1916 – 1929, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Fritz Hackert, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1989 (以下 JRW 5 と略記)

Joseph Roth, Werke6 Romane und Erzählungen 1936 – 1940, Herausgegeben und mit einem Nachwort von Fritz Hackert, Verlag Kiepenheuer & Witsch, Köln, 1991 (以下 JRW 6 と略記)

(注)

- 1) Vgl. Frey, Reiner: Kein Weg ins Freie.: Roths Amerikabild. Frankfurt am Main; Bern : Peter Lang 1983. S. III
- 2) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 18
物語の舞台となっている地名の具体的な記述はないが、「ポーランドのマンチェスター」と呼ばれる工業都市ウッジだとする見方が一般的である。
- 3) Vgl. JRW. 4 S. 153
- 4) Vgl. JRW. 4 S. 242
- 5) Vgl. JRW. 4 S. 596
- 6) Vgl. JRW. 4 S. 596
- 7) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 28
- 8) Vgl. JRW. 6 S. 546
- 9) Vgl. JRW. 6 S. 566
- 10) Vgl. JRW. 5 S. 481
- 11) Vgl. JRW. 5 S. 3
- 12) Vgl. Raffel, Eva: Vertraute Fremde. Das östliche Judentum im Werk von Joseph Roth und Arnold Zweig.: Gunter Narr Verlag Tübingen 2002 S. 206
- 13) Vgl. JRW. 5 S. 3
- 14) Vgl. JRW. 5 S. 3
- 15) Vgl. JRW. 5 S. 3

- 16) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S.205
 コサクによる不定期的なシュテトル襲撃は、ミュージカル「屋根の上のヴァイオリン弾き」でもよく知られている光景である。
- 17) Vgl. JRW. 5 S. 9
- 18) Vgl. JRW. 5 S. 26
- 19) Vgl. JRW. 5 S. 26
- 20) Vgl. Raffel, E. a. a. O S. 212
- 21) Vgl. JRW. 5 S. 96
- 22) アラン・M・クラウト著、中島健 訳、「沈黙の旅人たち」 青土社（1997年） 202-3
 頁参照
- 23) Vgl. JRW. 5 S. 67
- 24) Vgl. JRW. 5 S. 48
- 25) Vgl. JRW. 5 S. 73
- 26) Vgl. JRW. 5 S. 74
- 27) Vgl. JRW. 5 S. 74
- 28) Vgl. JRW. 5 S. 77
- 29) Vgl. JRW. 5 S. 78
- 30) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 126-127
- 31) Vgl. JRW. 5 S. 76
- 32) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S.220
- 33) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 214
- 34) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 119
- 35) Vgl. JRW. 2. S. 885
- 36) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S. 214
- 37) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 120
- 38) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 115
- 39) Vgl. JRW. 5 S. 91
- 40) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S. 225
- 41) Vgl. JRW. 5 S. 78
- 42) Vgl. JRW. 5 S. 85
- 43) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 131
- 44) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S. 229
 ここで Raffel は、父に愛されることによって兄弟たちの憎しみを買い、不遇を囲うことになる旧約聖書の「創世記」に登場するヨーゼフと、家族から離れることによって名声を獲得するにいたるメヌヒムとを比較考察している。
- 45) Vgl. Raffel, E.: a. a. O. S. 203
 ハッピーエンドの結末を冒涇だとする批判は、マルクーゼをはじめユダヤ系の評論家に多い。そもそもロートの作品がイディッシュ語ではなく、ドイツ語で書かれていることに対して彼らの観方は批判的である。
- 46) Vgl. Bronsen, David: Eine Biographie. Köln 1993. Gekürzte Fassung der gleichnamigen Ausdruck der gleichnamigen Ausgabe Köln 1974. S. 217
- 47) Vgl. JRW. 3 S. 563
- 48) Vgl. JRW. 3 S. 570
- 49) Vgl. JRW. 3 S. 566
- 50) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 144
- 51) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 92
- 52) Vgl. JRW. 2 S. 879
- 53) Vgl. JRW. 3 S. 571

- 5 4) Vgl. JRW. 2 S. 256
 5 5) Vgl. JRW 3 S. 614
 5 6) Vgl. Frey, R.: a. a. O. S. 153
 5 7) Vgl. Frey, R.: a. a/ O. S. 171

ここでのプロテスタントの系譜は、ルターに始まり、プロイセンのフリードリヒ大王、ビスマルクに引き継がれ、ヒトラー、ローゼンベルクからナチス幹部へと至るものである。

Über das Amerikabild von Joseph Roth in seinem Roman *Hiob*

Koji MIKI

Department of Applied Mathematics

Faculty of Science

Okayama University of Science

1 - 1 Ridaicho, Okayama 700-0005, Japan

(Received October 1, 2007; accepted November 2, 2007)

Dieser Aufsatz behandelt das Amerikabild von Joseph Roth, hauptsächlich in seinem berühmten Roman *Hiob*. "Amerika" spielt in diesem Werk eine wichtige Rolle. Die Hauptperson Mendel Singer ist Ostjude. Als patriarchalisches Oberhaupt der Familie verkörpert er die Werte der jüdischen Traditionen. In Zeiten der Not verlässt er die Heimat und wandert mit seiner Familie nach Amerika aus. Dort suchen ihn viele schmerzliche und tragische Ereignisse heim, wie Hiob im Alten Testament. Der Roman *Hiob* beinhaltet verschiedene Probleme, z..B. die jüdische Exilsituation, den Generationskonflikt, den Zusammenbruch der Familie, die Zivilisationskritik usw. Vor allem ist der Untergang des Vaters sehr bemerkenswert. Im Gegensatz zum Europa, besonders zum Ostjudentum, ist die Vaterherrschaft des Amerikas schwächer und altmodisch. Diese Themen kommen auch in seinen Essays *Juden auf Wanderschaft* und *Antichrist* wieder hervor. Bei Roth ist Amerika als technokratische und rationale Gesellschaft, als Symbol der Freiheit und des Reichtums, aber zugleich als Ort der enttäuschten Hoffnung geschildert. Besonders fällt in seinen späten Werken das negative Amerikabild auf. Diese Anschauung hängt mit der Bedrohung des Nationalsozialismus zusammen. In beiden Aspekten findet Roth eine Gemeinsamkeit heraus, nämlich die Entfremdung des Menschen im mechanischen System. Daraus entsteht seine Skepsis gegenüber der amerikanischen Modernität. Ich möchte unter der Perspektive der Anti-Utopie das Amerikabild Roths betrachten.